

庭における適応」(大西教授らとともに)

このうち、2)および3)の研究主題は、上述の2.青年期に関する研究に包括することが可能である。

最後に、依田教授を会長とする「青年心理学研究会」(第2回)が、昭和45年12月6日に、名古屋大学教育学部で開催されたことを付記する。(1971年11月22日)

(1) 塩田芳久編：自主性の基礎理論 明治図書 1970

.10

(2) 大西誠一郎編著：親子関係の心理 金子書房 1971.1

(3) 宮川知彰司会：シンポジウム“高等教育における青年” 日本教育心理学会第13回総会 神戸大学 1971.10

(1971年11月22日)

研究の方向づけと経過

大橋正夫

私の研究の最終的な目標が対人関係の心理学の体系を樹立することにあること、そして現在そのためのアプローチとして三つの方向をとっていることは、前報に記したとおりである。このうちの第一、対人関係の心理学的構造の問題については、考究は特記するほどの前進をみせていないので省略することにし、他の二点について研究のその後の経過を記すことにする。

1. 印象形成過程の研究——この問題については、私は以前から関心を持ち、少しずつ研究をしてきているが、それはいずれも個人研究としてであった。しかし、本年度にはいってから、私のほかに5名の方の参加を得て研究チームが構成された。そして、私個人の力では及ばないようなスケールの研究ができるような体制が次第にできあがりつつある。このチームは、本年度当初の討議において、二つの方向から印象形成の問題にアプローチすることが決定された。

その第一は、パーソナリティの印象形成における、与えられた言語的情報の統合過程に関する研究である。すなわち、数個の特性語を架空の人物に帰着させることによって形成されるパーソナリティの印象の評価的次元上の評定値が、特性語のそれからどのように予測されるか、という問題である。これについての現在までの成果は本巻の他のところに記載されている。これは、研究のいわば序報にあたるものであり、今後いっそうこれを発展させていく予定である。なおこの概要は、9月におこなわれた日本グループ・ダイナミクス学会第17回大会

において発表された。

チームの研究課題の第二は、顔写真を手がかりとした、未知の人物についての印象形式過程の研究である。これは、当初は第一の課題と並行的に進行させる予定であったが、第一の方に精力の集中を余儀なくさせられたため、ほとんど進行していない。現在計画を検討中であるが、同一人物のカラー写真と白黒写真による印象のちがいをまず検討することになろう。

2. 構造モデルと線型モデルの比較検討——この研究は昨年度後半から私の個人研究として進行中である。これも広義の印象形成の問題と考えることができよう。すなわち、数人からなるグループに対する評価(それに参加したかしたくないか)が、構成メンバーに対する評価(行動を共にしたいかしたくないか)からどのように予測されるか、という問題からはいっていく。その予測のためのモデルとしては、パーソナリティ印象の場合の予測のためにたてられた平均モデルをはじめとする線型モデルが適用できよう。しかし、要素間の関係を見逃すかかるとモザイクなモデルではすべてをおおいつくすことはできない。やはり構造的な観点がそこに必要になってくる。少くともこの両者の構想を相互補完的に援用することによって、いずれか単一の観点よりする予測よりもより精度の高い予測が可能となることを明らかにした。近日中に論文として発表する予定である。

(1971年11月22日)

研究経過報告

続 有 恒

昨年と同様、「紀要」17巻のメ切から同18巻のメ切までの1年間の研究経過について、簡単に述べる。

1. 「いわゆる過疎地域」の家族関係の研究では、7月

中旬に熊本県球磨郡水上村へ出かけ、昨年同様40数ケースの面接資料を採集したほか、中学生および青年団の人たちと集団面接による資料採集をした。8月上旬には、